

[成果情報名] 促成イチゴのアザミウマ類に対する天敵資材「アカメガシワクダアザミウマ」の放飼時期と防除効果

[要約]天敵資材「アカメガシワクダアザミウマ」の春放飼（2月下旬・3月上旬に10a当たりそれぞれ15000頭処理）は、イチゴのアザミウマ類の密度と果実被害を5月上～中旬まで低減することができる。

[キーワード]促成イチゴ、アザミウマ類、アカメガシワクダアザミウマ、天敵資材

[担当]長崎県農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

[連絡先]電話 0957-26-3330

[区分]野菜

[分類]指導

[作成年度]2015年度

[背景・ねらい]

促成イチゴでのアザミウマ類は、秋季に施設外から侵入し、年内収穫果実に被害を及ぼす。また、越冬したアザミウマ類による被害は3月頃から目立ち始め、4月頃から増加する侵入虫によって被害が拡大する。防除は薬剤散布が中心であるが、防除期間が長期にわたるため薬剤の散布回数が多く必要な薬剤が不足する場面が認められる。そのため、薬剤に頼らない新たな防除技術の確立が求められており、新規天敵資材であるアカメガシワクダアザミウマ剤の有効性を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. アカメガシワクダアザミウマ（写真1）を春放飼（2月下旬・3月上旬に10a当たりそれぞれ15000頭放飼）すると、収穫終期（5月下旬）まで生息が認められる（図1）。
2. アカメガシワクダアザミウマの春放飼は、アザミウマ類の密度を5月上旬頃まで、果実被害を5月中旬頃まで低減することができる（図1、2）。
3. アカメガシワクダアザミウマとアザミウマ類の密度比0.1以上で、アザミウマ類の密度を抑制する傾向にある（図1）。
4. アカメガシワクダアザミウマを秋放飼（11月中旬・下旬に10a当たりそれぞれ15000頭放飼）すると、越冬するものの春季のアザミウマ類の発生に対応できず密度低減効果が認められない（図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. アカメガシワクダアザミウマは、石原バイオサイエンス株式会社の天敵資材「アカメ」（平成28年12月販売開始予定、適用作物：野菜類（施設）、対象病害虫：アザミウマ類、使用量：10,000～15,000頭/10a）を使用した。
2. アカメガシワクダアザミウマは、イチゴの花粉で増殖でき、雌成虫で30日以上生存・産卵する。そのため、アザミウマ類の寄生が認められない状況で放飼しても、その後にアザミウマ類が発生した際に防除効果が期待できる。
3. アザミウマ類は、ヒラズハナアザミウマ（放虫：秋放飼では11月上旬に2頭/10株、春放飼では2月中旬に5頭/10株）、ネギアザミウマ（自然発生）の混発であった。
4. アザミウマ類の急激な増殖時、施設外からの多飛来時には、アカメガシワクダアザミウマでの防除を中断し、薬剤散布による防除に切り替える。
5. 摘葉、摘果された残渣には、アカメガシワクダアザミウマが多く残っているので、2～3日畝上に静置することで、持ち出しを防ぐことができる。

[具体的データ]

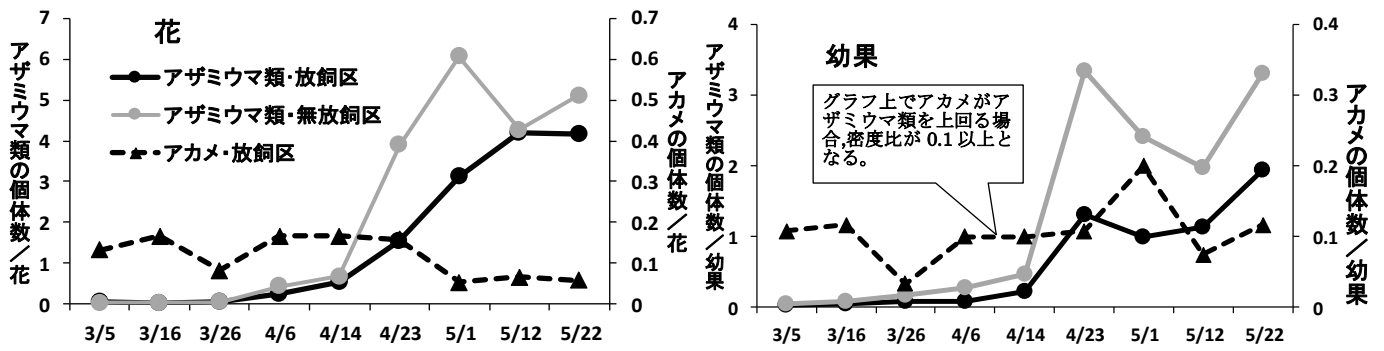


図1 春放飼におけるアザミウマ類及びアカメガシワクダアザミウマの発生推移(2015年)

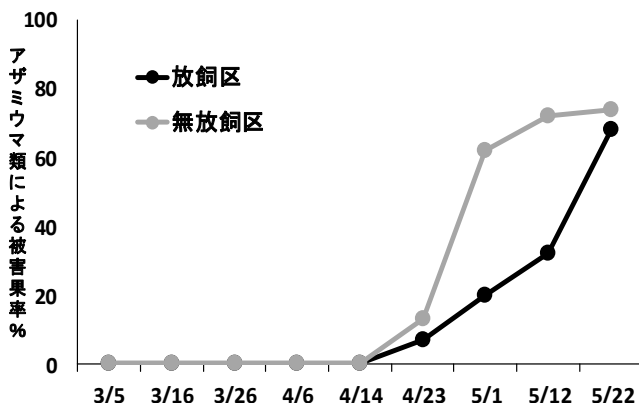


図2 春放飼における果実被害の推移(2015年)



写真1 アカメガシワクダアザミウマ
(原図: 石原産業株式会社(一部改変))

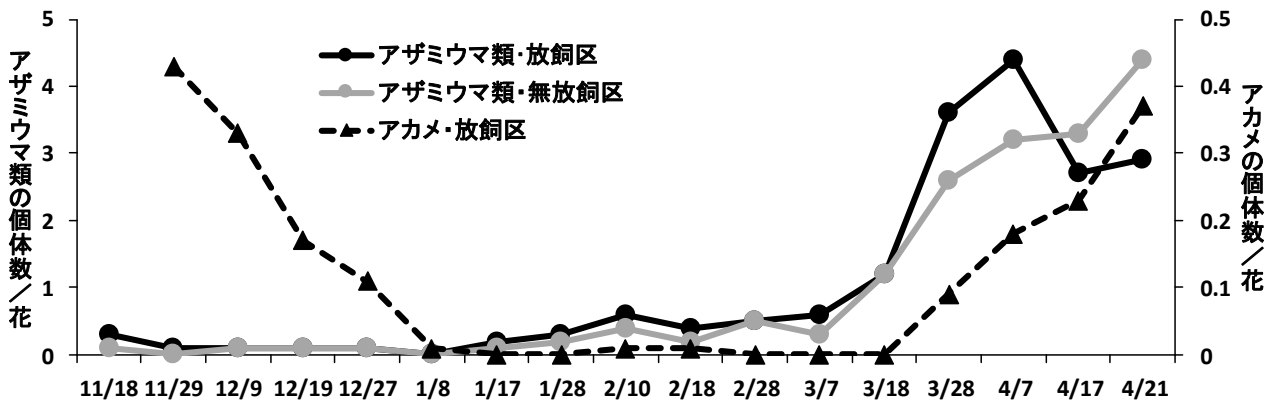


図3 秋放飼におけるアザミウマ類及びアカメガシワクダアザミウマの発生推移(2014年)

[その他]

研究課題名：病虫害防除新資材の合理的利用試験

予算区分：県単

研究期間：1972年度～

研究担当者：陣野泰明、植松綾子